
Judah—ユダ—

沖田 光海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

J u d a h — ユダー

【Nコード】

N 7 3 0 6 Q

【作者名】

沖田 光海

【あらすじ】

A l i c e

暇な貴族達が立ち上げたゲーム。
集められるのは多くの犯罪者。

勝者は無罪になるという言葉に騙され、勝者を目指す。

ユダは其中で一人、別の目的を持って、このゲームに参加していた

プロローグ I Alice

プロローグ

しんと静まり返った町、ザンと剣が肉を硬い骨をも裂く音がする。剣を持つは、ショートヘアの少女。

銀に輝く剣を携え、少女は無感情な目で、死体を見下ろしていた。
「颯生、これで何体目だ？」

少女の言葉とともに、剣が淡い光に包まれ、少女の手から離れると人型をとった。

光が消えた後には、剣の姿ではなく、やわらかい雰囲気をもった銀髪の青年がたたずんでいた。

「今日はこれで、丁度五人目ですよ。」

整った顔の口元にやわらかい微笑を浮かべながら、青年は今日の天気のことを話すように言った。

少女は一言「そうか。」と呟くと、興味なさそうに死体をもう一度見て、首につけたれたドッグタグを引きちぎると、その場を後にした。

Alice
アリス

いつの間にか、この世界で迷い子を意味する言葉で呼ばれたこのゲーム。

ある日突然、この世界を統べる女王から手紙をもらい、女王の私有地であるこの町に集められる。

この町に連れてこられた人間は“迷い子”と呼ばれ、あるゲームをすることになる。

ルールは簡単。

一人一人、迷い子には、トランプのスイートにちなんだドッグタグを与えられる。

このマークにちなんでそれぞれルールの異なる“ゲーム”をする。

ハートは、よりたくさんの異性を惑わすこと。一番たくさんの異性を惑わせたものが勝者となる。

クラブは、よりたくさんの知識を持つこと。一番頭のいい者が勝者となる。

ダイヤは、よりたくさんの金を稼ぐこと。一番金を稼いだものが勝者となる。

そして少女が持つドッグタグは……

スピード。

スピードは、よりたくさんの者を殺すこと。よりたくさんの者を殺したものが勝者となる。

この町に集められた人々にはある共通点がある。

それは“犯罪を犯したことがある”。

この町の“迷い子”^{アリス}とは、犯罪者たちなのだ。

犯罪の種類によって振り分けられ、重罪人達は否応無くスピードのタグを付けられる。

そして、この町で勝者となったものは、女王に謁見し、彼女から直々に無罪処置を受けるのだ。

自らの罪を無罪にするため、迷い子たちは勝者になろうとする。

時に仲間を裏切り、時に他人を蹴落として……

そして勝者へと上り詰める。

それが暇な貴族の賭け事に使われていると知らずに……、あるいは、知っていながらも無罪のために、勝者を目指す。

Aliceとは、そういったゲームだ。

第一章 ―裏切り者の剣―

薄汚れた灰色の町並みに赤黒い液体が付着していた。

ここはあまり暑い気候の街ではなく、むしろ北のほうの涼しい気候の街だから、異臭が強いというわけではないが、かといってまったくしないわけでもない。

不快なおいに顔をゆがませながら、ユダは街を歩いていた。

「“獲物”の気配は？」

彼女の半歩後ろを歩く銀髪に浅黒い肌の青年、颯生さつきにそう聞くと彼は小さくため息を吐く。

「お嬢、そんなことよりこのあたりを早く出ましようよ。……」

死臭が強すぎて、俺にはとても……うぶっ」

「人を切る剣のくせに、何故そんなに……」

「切った後は腐ったりしません！そのまま放置しておくから腐るんです！あの真夏の生ゴミ置き場みたいな匂いはどうも苦手で……」

言いながら、彼はさらに顔を歪ませた。

「うっえ、気持ち悪い……。」

「吐くなら他所でやれ、他所で！」

突き放すような物言いをする主人に「酷い。」と小さくつぶやくと、颯生の身体から淡い光が立ち込め、見る見るうちに彼を剣の姿に変えていった。

『お嬢！これなら大丈夫でしょ』

ユダはどこか楽しそうな声で言う剣の姿になった颯生で、地面をガンと叩いた。

『あ痛っ！――！』

「最初からそうしていればいいだろ！馬鹿――！」

強い口調でそういうと、今度は泣き舌交じりの声が聞こえてきた。

『だつてえ……』

「？　なんだ??」

何やらもったいぶっているような雰囲気を出しながら言う颯生の言葉を促すと、颯生は姿が見えなくても、声だけで照れているようなことが分かるような口調で話す。

『お嬢と二人で、一緒に歩きたかったんですよ』

語尾にハートがつきそうな声音で話す颯生の言葉に、ユダは一瞬固まった。

『いや、何でしょうねこういうの。デートですか？ 憧れていたんですよねえ。俺。お嬢とこうやって二人で歩くのに。』

「……馬鹿も休み休み言え！」

もう一度、今度は強くたたきつけてガンと音がした。

『いったあゝい。酷いじゃないですか！ 刃こぼれますよ！ 俺こう見えて“宝剣”なんですよ！ こくほーなんですよ。』

「……刃こぼれなんかしないだろう？ お前。宝剣ということは認めるがあくまで国宝級の価値とやらがあるだけで、おまえは国宝ではないだろう。 ついでに言うところくほーじゃなくて国宝だ。」

宝剣。

颯生はこの国に代々伝わる特殊な剣だ。

意志を持ち、主や本人が望めば、擬人化もする……所謂魔剣だ（魔剣というと本人は怒るのだが）。

一見どこにでも見るような、だがよく見ればささやかだが綺麗な細工があり、美しい刀身をしている何の変哲もない剣だが、彼を扱えるものはそうそういない。

一般人は触れることすらできず（特殊な結界によって阻まれるのだ）、たとえ持てたとしても下手をすれば寿命が削られ、精力を吸いつくされる。

剣自身が主と認めた者以外、彼に触れることはできない。

簡単にいえば、剣が主と認めたものにこそ、彼を扱う権利があるのだ。

そして、彼を扱うにはある契約がある。

契約といっても至極簡単なものだ。

煥が主と認め、主が剣を認める。

そしてはじめて契約が成立し、彼を扱うことができるのだ。

普段はどこか抜けた……ふわふわしたイメージを抱かせる青年であるが、その力はとてもすごいものだ、本人は言っている。

正直、ユダは信じていないのだが。

『お嬢、いつになったら俺がすごい剣だってこと、信じてくれるんですかあ。』

「お前みたいなやつにすごい力があるなんてとても信じられん。」
ぴしゃりとユダは言い放つ。

『お嬢、貴女が俺を使うには、俺を認めてくれないといけないんですよ。』

「僕はお前の存在は認めても、力までは認めていない。」

『で、でもお、僕の力解放したら、もっと楽に敵を倒せますのにい。』

「必要ない。」

『え、何で!』

颯生は驚愕し、ユダの顔を見た。

「僕の力で成し遂げたいことがあるんだ。おまえは良き相棒パートナーだが、おまえに頼りすぎると、僕自身お前に依存しきってしまう。そうなればお前に迷惑をかけてしまうだろう? ……」

僕は、自分でできる限りのことはしたいんだ。颯生は、僕が迷わないよう導いて僕を支えてくれ」

『貴女が、そう望むのなら……』

「ありがとう。」

らしくもなく素直に礼をいう主の様子に、颯生は赤面した。

—— 本当は、貴女が俺に依存してしまっても、貴女がいるなら、俺は迷惑掛けられても、いいんですけどね。

その思いは心に秘めて……

第二章　―殺人ゲーム―

真つ赤な血が、颯生の刀身に付着した。

ユダの黒い衣服も粘着質な血がべつとりと付着し、所々茶色く変色してバリバリと音を立ててはがれた。

『お嬢！5時の方向から2体、3時の方向から1体です！　気をつけてください！』

「距離は！？」

『5時の方向から約10メートル、3時の方向から約25メートルです！』

颯生の説明からすると、2体の方はチームという事になる。

どうするか、と目の前の敵をなぎ倒しながらユダは考えた。

それを読み取り、颯生はやや軽い口調で答えた。

『大丈夫ですよ、お嬢は強いですから。心配からしてたぶん新参者ですね。　いい獲物ですからとつと殺^やっちゃいましょう！』

「そうか。　なら、こちらから出向いた方がいいな。」

颯生が示す方向へ走ると一組の男女が居た。

まとう雰囲気からして、恋人同士か何かだろう。

（そんな奴らがどうして此处に？）

考えていると男の方が切りかかってきたが、あまりにも弱い攻撃に避ける気もうせて、颯生の鞘で軽く受け流した。

（やる気が出ないな。さつさと殺すか……？）

まずは女の方から――　後々悲鳴を上げられたら五月蠅いから、即死を狙う。

剣（颯生）を構え、急所を狙おうとしたところに、いつの間にか男が割り込んできて、剣を受け止めた。

どうせ素人だろうと思い、速さはあるがいつもより軽い一撃だ。思いのほか筋肉の付いているこの男なら受け止められるだろう。

（まもった？）

足手まといを？

何故？？

疑問に思った瞬間、昔の映像が脳裏にフラッシュバックした。

「大丈夫だよ。アリアは僕が守るから。」

なっている少女に元氣付けるように言う幼き日の自分。

「アリア、大好きだよ。僕だけの……」

——アリア

彼女を守るため、僕はここにいる。

早くゲームを終わらせないと……

ユダは、男の剣を振り抜いた。

「うわ」

「きゃ！」

男の声と女の声が重なる。

「……他愛も無い。下らない。」

つぶやき、剣を振り上げる。

二人は死を覚悟して、抱き合った。

その様子になにやら胸のうちを熱いものが駆け巡った。

「。。。」

アリアの口からこぼれる。名前。

「、すきよ。いつまでも、といっしょにいれるよね？」

僕の本当の名前。

裏切り者と周りがつけたユダというイツワリの名前じゃなくて、
本当の……僕達が小さい頃に死んだ父さんと母さんが付けてくれた
名前。

「父様と母様が亡くなって、寂しいと思ったこともあったけど、

と一緒なら、寂しくないわ。ねえ、ずっと、私達一緒よね？

貴方は私の半身ですもの。」

「……アリア」

答えるように幼き日の僕は彼女の名を呼んだ。

あの時は幸せだった。いつか別れる日が来ると知っていたけど。

僕とアリアと颯生の……たった三人の狭くさびしい、小さな世界だったけど。

そうだ、あの日々を取り戻すために僕は闘っているんだ。

昔は長かった髪を切って、男装して少年剣士を真似た格好で……、女であることを棄てて……

戦いが終わるまで非情でいなければいけないと思っていたのに、どうして思い出すんだ！

「ねえ、」

気が付いた時には颯生を鞘に納めて二人に問いかけていた。

「君達はどうしてこんなところにいるんだ？」

「どうしてって……」

オンナがつぶやいて口をつむぐと、男が答えた。

「俺たちは、あの冷血漢……俺たちの村に新しく入ってきた領主に逆らって此処に入れられたんだ！」

なるほど。

心の中でつぶやくと男は続けた

「あいつのせいで、たくさん村人が死んだ。だから、敵をとってやったんだ。だが、その罪で俺はこの町に入れられ、そればかりか、何の罪もないナミも……」

よほど口惜しいのだろう。

ナミと呼んだ女を抱きしめて、男は唇を噛み締めた。

「大丈夫よ、ダン。私貴方と一緒になら……」

「貴方と一緒になら寂しくないわ。」

ナミの声とアリアの声が重なって聞こえた。

『お嬢？』

訝し気に、颯生はユダに声をかけるが、反応が無い。

「貴方は私の半身だもの。」

アリア

口の中だけでつぶやく。

「ずっと、一緒に……」

はかなき笑みを浮かべたアリアの顔が浮かんた。

「……アンタは、どうして此处に？ アンタみたいな、女の子が、どうして？」

男の声に思考が一端中断された。

「……僕は、……守りたいものを守るために……。」

その言葉に男——ダンの顔が明るくなった。

「じゃあ、俺と同じだ。……なあ、3人で協力しないか？ 3人ならきつと早く「ふざけるな！」

男の声をさえぎってユダは剣を抜き、切っ先を男の喉元に構えた。

「“俺と同じ”?? 笑わせるな。お前なんか、僕の何が分かつと言うんだ！ お前は幸せ者だな。大事なものがその手にあつて僕は会うことすら許されないのに」

「……」

呆然とするダンをよそにユダは剣を納める。

「さっさと行け、僕の気が変わらないうちに……。」

「どうして？」

「貴女のような娘^こが一人で大丈夫なの？」

ナミの言葉にユダは鼻で笑って返した。

「君たちのような足手まといがいるよりは、な。」

さっさといけ、ともう一度促すと、二人は何度か振り返りながら、

去っていった。

『残虐非道と恐れられているお嬢らしくないですね。何かあったんですか？』

軽口を叩きながらも、心配そうに颯生は言った。

「……あの男。ダンとかいったか……。」

『ああ、あの彼がどうしたんですか？』

「昔の僕と同じ目をしていた。」

『……昔の、お嬢。』

「そうだ。」

命をかけて大事なものを守ろうとするあの眼。それに過去の自分を重ねて殺せなかったのだ。

『お嬢……。』

「分かっている。そんなこと無意味だ。弱い奴らは何れ殺されるし、殺人狂に死ぬまでいたぶられるよりは、僕が一刀の元に切り捨てた方が、まだ苦しまなくてすむと。」

『甘さは棄てたといっているのに。俺もそう思っていたのですが、お嬢が急所を狙うのは、お嬢なりのやさしさだったんですね。』

「やさしいなど、あるものか。僕は飽くまで非情でなければいけない。殺す相手に慈悲など……。」

『……（貴女にはこんなゲームにあいませんよ）』

心の中で颯生はつぶやく。

男勝りだが、とても優しい主人なのだ。

そのことを知っている颯生からすれば今の状況は心を痛める種にしかない。

「いくぞ。颯生。このはなしはもう終わりだ。」

『お嬢……。』

「今日は疲れた。一端どこかで休んで、また明日からはじめよう。」
『是非そうしてください。倒れられでもしたら、苦労するのは俺ですから。お嬢軽いから運ぶの楽ですけど、追っ手から逃げながらって言うのはちょっと。』

「ふん、言っている。」

「ええ、個人的にはやせすぎだと思いますが……。」

「棄てられたいか？」

「冗談ですよ！冗談！！」

また、軽口を叩くことができるユダを見て、颯生は安心した。
この調子なら明日も大丈夫だろう、と。

大丈夫だ。大丈夫だよ。

アリア、すぐに君をたすけに行くからまっていて。
アリア……、僕のたった一人の。

第三章 ― リズ ― (前書き)

新キャラ登場です。

第三章　―リズ―

赤毛の青年、リズは美人局の罪でこの町に入れられた。

仲間の女はどこに行ったのやら、まったく見当もつかない。

正直、リズにとってあの女は単なる商売仲間でしかなかったし、彼女が今どこにいるなんて、自分には関係ないことと割り切っている。

リズたち、ハートのドックタグを付けられた罪人が行うことは“より多くの異性を惚れさせること”。

ハートの町には囚人以外の“カモ”の人間が何人もいる。

一体何処からつれてきたのやら……、その人々の“出所”を知る者は少ない。

自分からこの町に入ってきたという物好きもいる。

この囚人収容の町から出るには条件を満たし、国王直々に無罪にしてもらねばならない。

囚人収容の町は、ランプのスートにちなんで4つのブロックに分けられる。

基本的にどのブロックの異性を口説いても良いというのがこの町のルールだ

もし、オトすことが出来たら、相手からハート型のカードを渡される、

その数で何人惚れさせたかを競う。

まるでホストのようだと思いつながら、リズは案外うまくやっていった。

もともと、こうやって人を騙す生活をしてきた。

異性をオトすなんて事なんでもない。

その日、リズはスピードの町を歩いていた。

すると、前方に見覚えのある男女の影。

「お！ユダ！！」

軽い調子で声をかけると、ユダは一瞬だけこちらを見ると、ぷいとまたそっぽを向いてしまった。

ユダの隣を歩く青年、颯生はさつきから無視を決め込んでいる。「つれねーなあ。 同じ時期にこの町に入れられた同期ってヤツなのによう」

「時期は同じでも君と僕のやることは違う。 とつとつせろ。」
ユダに絡もうと腕を伸ばすが、あっさりユダ本人に振り払われ、冷たい視線に「うせろ」という言葉。

普通の人なら此処で諦めるが、リズはしつこいぐらいに彼女の周りをうろつろした。

「まあまあ、そんなにコワイ力才しないで、オレと話さな……」
「死んでください！」

ガン

再度ユダに絡み付こうとすると頭上から拳骨が降ってきた。

先ほどまで面白くなさそうに成り行きを見守っていた颯生だ。

キツとリズをにらみつけるは、まるで夜叉のごとき憤怒の表情。

いつもは怒りや悲しみといった感情は表に出さない颯生だが、ユダが関わっている時だけは別だ。

まるで別人のように感情を露わにする。

「消えてください、むしろ死んでください。 貴方がいると迷惑です。」

「

一息にそう言った颯生の横でユダは小さく頷く。

その様子に颯生が一瞬ホツとしたような顔をしたのをリズは見逃さなかった。

「はあゝん。 なるほどね。 大事な主様がどつか別の人間の方へ行くのが嫌なんだあゝ。」

「な、なにを！？」

「つまりは、嫉妬していたわけだろ？ ユダを取られなくなつて。」

「

「うう……。」

それきり、颯生は黙ってしまった。

その様子にユダは小さくため息をつく、口を開く。

「まったく、こんなバカな男の口車にのせられおって……。」

「バカは侵害だなあ。」

絡み付こうとするリズにけりを入れてから、ユダは続ける。

「心配するな、嫉妬しなくても僕はこんな男になんかなびかん。」

「お、お嬢！」

なにやらきらきらとした瞳で颯生はユダを見つめるが、

「今はそうでも何れ本気にさせてやるからなあ！」

めげないリズにまた颯生は不機嫌になった。

「オレはユダのコト狙ってんの。アンタ、邪魔しないでくれる？」

なおも近づこうとするリズを颯生は遠ざけた。

「ねえ？忠犬クン？」

リズは颯生のことを皮肉って「忠犬」と呼んでいる。

バカにしたような呼び方に不快になった颯生は間髪無くリズに蹴りを入れようとしたが寸でのところではけられた。

「おっと、忠犬クン。そんなにご主人様取られたくない？」

「当たり前です。むしろ近づいてほしくないんですよ。貴方のような輩には。」

「へえ、忠犬クン。もしかして、ユダのコト好きなの？」

その言葉にポンと音を立てて颯生の顔が赤くなった。

「な、なな何言い出しやがるのです？?!」

「ははっ、おっもしれえ、図星なのか？」

けられらとからかうように笑うリズに、しかし颯生は反論できなかった。

見かねたユダは何を思ったのか、すっと颯生の腕に自らの腕を絡めた。

「は？ユダ??」

「お、お嬢??」

二人の目が同時にユダに集中する。

「もし、僕とコイツが恋仲だとしたら、どうする?」

妙に一婀娜 あだ っぽい、艶めかしい笑みを浮かべながら、ユダは問う。

「え?もしかして、そういう関係?」

「そうだ、と言ったら?」

「……心も、身体も??」

「とつくにまぐわいあっているとしたら?」

クスリと口元に浮かべた笑みと、そこから出される性的な言葉に
なんだか聞いているこっちが恥ずかしくなったリズは、苦笑いを浮かべ立ち去った。

ふう、とリズが立ち去った後、息をついてユダは颯生から離れた。

「え、えつと、今のは??」

「狂言だ。あいつをうまく騙すための、な。」

「そ、そうですか。」

落胆した。

もちろん体の関係なんてないし、恋人同士になった覚えも無い。

……そうなってほしい、と願ったことは何度もあるが。

わかつている、事なのだ。

ただ、意思を持ち、実体化して人形ひとがたと成すことはできても、自分

は剣で彼女はその主。叶うことのない思いだと分かってはいたが、
少しでも自分の方へ彼女の想いがあつたのなら……。

「……と、言ったらどうする?」

ユダの言葉に思考が中断される。

彼女は一体なんと言った?

その言葉の意味は??

ぽかんと間拔けた顔で口を開いている颯生にユダは行くぞ、と手を差し伸べた。

「え、えつと、お嬢? どういうこと、ですか?」

「さあな、自分で考える。」

すつと差し伸べた手を引き、ユダは腕を組む。

「さつさと行くぞ。いつまで待たせる気だ？」

空が紅い所為か、逆光でよく見えない彼女の顔がわずかながら、赤らんでいるような気がした。

叶わない思いと分かっていたけど。

叶う時が来るかもしれない。

「ハイ！お嬢！」

いつもと同じように颯生はユダの横に並んで歩いた。

一方その頃――

「あゝ、もうっ……くそー!!」

リズは顔をゆがめ、その場にへたり込んだ。

「全然勝ち目ないじゃないか……。」

ポツリとつぶやく。

数年前までリズは城の使用人として働いていた。

その時に会った皇女と、その妹。

儚げながらも、凜とした姿の“彼女”にリズは恋をした。

彼女はその時のことなんて覚えていないが、リズは今でもはつきり思い出せる。

あの日、リズが城を出る5日前、エールという少女が死んだと、国中に知れ渡る前までは

第三章 ―リズ―（後書き）

新キャラ リズくん登場です。

なんというか、彼は動かしやすいキャラなんで好きです。

絶対幸せハッピーENDになる気はしないのですがね。

彼の恋は実りそうにないです。

一応このあたりから少しだけ恋愛要素あります。

書きやすいんですけど、書いているの恥ずかしいため、あまり出せる自信は無いのですが…

ごめんよリズくん

第四章 エールと守護（ナッシュ）と……

「やつほー！ ユダー！」

元気良く声をかけると、黒白の髪を持つ人物の煩わしげな二つの目線。

「また、貴方ですか。」

ため息混じりに言うは、銀髪青年、颯生。

「ほうっておけ。」

黒髪の少女ユダは、ずっとリズから視線をそらす。

「冷たいことを言うなって。」

「消えろ、殺すぞ。」

射るような視線を向けられ、リズはひっと顔を引きつらせる。

「（流石に、連続2日はまずかったかなあ）」

ユダの眼は本気だ。

「颯生。」

「はい！お嬢ー！」

涼やかなユダの声に、従順な颯生の声が答える。

シウウウウと淡い光に包まれ、現れた剣、颯生の切っ先をリズに向ける。

「死ね。」

「え、いや……べつのタグ持っている奴は殺しても意味が無いんじゃない……。」

「だからといって殺してはだめというルールも無い。煩わしいのは嫌いだ。」

「で、でも、無意味に人を殺して後味悪くなったりとかは……。」

「しないな。」

キッパリと否定した

「君など居ないほうが世のためだ。無意味なんかではないしな。」

「いや、ひどくない？それ??」

「全然」

言うが早い。首元を刃が掠めた。

直撃しなかったのはとっさに避けたからで……

それはつまり避けなかったら、首と胴がはれていたという事で……
首と胴が離れるという事はつまり……

そこまで考えてサア！と顔が青ざめた。

——ユダのヤツ、本気だ。

直感でそう思った。

逃げようにも、情けないことに腰が砕けて無理。

「（ええ！？オレ絶体絶命！！！？）」

剣を構えるユダが本気で悪魔に見えた。

「（ええい！こうなったら一か八か……！）」

すつ、と息を吸って、一つの言葉をつむぐ

「エール」

その言葉にユダは一瞬固まる。

『お、お嬢』

リズには聞こえないが、颯生も切羽詰った声を上げた。

「エール」レイ「ラザレンユ。アリア」レイ「ラザレンユ皇女の

双子の妹で数年前に病死した、とされている。」

「……。」

「ユダ、お前のことなんだろう？」

ユダは目を見開いた。

「何故、それを？」

「調べたから。後オレも昔は城に居たんだぜ？」

お前は覚えちゃいないかもしれないけど、といってリズは笑った。

「その入れ替わりに、皇女の影武者となる“少年”ナッシュが皇女の護衛になった。これも、お前のことだろう？」

「……そこまで、知っているとは……。……弁解はしない。続けてくれ。……おまえの知っていることを話してほしい。」

「……オレの知っていることはこのくらいさ。どうして、わざわざ

死んだことにしたんだ？ どうしてわざわざ男の振りをして……」

「僕は、」

辛そうに顔をゆがめ、ユダは話す。

「僕は、アリアを……姉さんを守りたかったんだ。……でも、女である僕には剣は持たせてもらえない。王族であるとするなら、なおさらだ。……だから、身分を棄て、女であることを棄て、僕はアリアを守るために闘った。……そして、アリアも婚約者が出来て、最初は嫌がったけど、義兄になる人はとてもいい人で、アリアも幸せならそれでいいと、僕は二人の幸せを願ったんだ。でも……」

ユダは言葉を区切った。

「僕がこの町に入れられる前、悪夢は起こった。この町を作り、Aliceなんてばかげたゲームを造った大臣、ジークフリート」
「リンドブラード。そいつが義兄を殺したんだ。そして心を病んだ姉は幽閉され、ヤツはそれを良い事に、無理やりアリアと拳式をあげ、まんまと王の座に着いた。僕はその時アリアを助けに行ったが、多勢に無勢、簡単につかまって今に至るというわけさ。」

過去の自分を嘲るようにユダは笑った。

いつの間にか一人形 ひとがた をとっていた颯生は苦しそうに顔をゆがめるとユダにかわって続きを話した。

「でも、俺達はそれを好機と取りました。たとえ、反乱者をまとめて殺すための罠だとしても……。無罪となる時、俺たちは王に謁見を許される。その時に……！！」

なるほど、とリズは思った。

ユダや颯生の抱えている大きな闇を見たような気がした。

「そうか、」

つぶやくとリズは背を向け、言った。

「……言っても止めないだろうからオレは止めないぜ。だがな……」
そこで区切ると、リズは振り返り、あるうことかユダの頬に口付けた。

「死ぬなよ。……アンタに心底惚れちまった男の願いだ。」

言つとどこか上機嫌で、リズは去っていった。

「な、なあ、颯生。」

「なんですか？」

「僕に口説いていたのって……、今まで早くこの町を出るための戯言だと思っていたが……。」

「……………」

「本気、だったのか？」

顔を紅くして言うユダに颯生は内心ため息を吐きたい気持ちに襲われた。

「（この人、鈍いんですよ、こういうの。　今までいろんな男性女性に言い寄られていても、まったく気付かなかったんだもんなあ）」

はあ、と思わず口からため息が漏れた。

「お嬢、そういう事は俺に聞かないでください。」

「どうして？」

「俺は剣です。人の心のことなんてよく知りません。」

「……………」

ユダは首をかしげた

「（颯生、もしかして、怒っている??　どうしてだ?）」
考えても答えは出なかった

五章 ― 無罪 ―

数カ月後

ある日町を歩いていると、一枚の紙を拾った。

いつもは気にせず通り過ぎるが、その紙が風に舞い、運良くユダの手元に滑り込んできたから思わず手にとってしまったのだ。

『なんでしょうかね？』

先ほどまで参加者と凄絶な殺し合いを繰り広げていた為、今日は剣の姿である颯生が首をかしげた。

「王直々の……というヤツだ。……………なん、だと？」

ざっと大まかにその紙に眼を通していたユダが目を見開く。 颯

生も紙の内容を見ると……

『なんですって！』

もう一度読み返しても内容は変わらない。

曰く、“一週間後、条件に満たした、スピード、クラブ、ハート、ダイヤから各一名、計四名を無罪とす”とのこと。

『喜んでいいのやら……、良く分かりませんね。』

「喜ぶ、べきなのだろう。やっとチャンスがめぐってきたんだ。」

だが、ユダの顔には複雑ななんと形容して良いか良くわからない色が浮かんでいた。

やはりというか、ユダがダントツで一位。

たくさんのタグを集めていたらしい。

「よっ」

王都へ行く馬車まで案内されている途中、ユダは見覚えのある男に声をかけられた。

「リス。」

「やっぱりね。」

にやりとリスは笑う。

「アンタが無罪になるだろうってことはなんとなく予想付いていたんだ。」

「お前が此処に来るとは思わなかったが。」

「へっ、いうねえ。俺を見くびつてもらっちゃ困るぜえ、つつつても、あと二人おとせてなかったら、ここにはいなかったけどな。」

二人と、もう二人の元罪人、そして兵士が馬車に乗り、城へ向かった。

城へつくと、四人は謁見の間へ案内される、が

「おい！ お前。」

ユダは一人の兵士に声をかけられた。

「こつちへ来い。」

逆らわない方が良いと判断したユダはおとなしく従う。

「なんだ？」

「あの男だか女だかわからないやつ、スペードだからじゃないか？」

リズのつぶやきにダイヤのタグを下げた男が答える。

「武器を持っていないかの検査とかじゃないの？」

興味なさそうに、クラブのタグの女が言った。

「そう、か？」

「そうだといいのだが。」

リズはユダが連れて行かれたほうをもう一度見た。

謁見には少し時間がかかるという。

しばらくすると王ジークフリート＝リンドブラードが姿を現した。

「ん？三人？？」

ジークフリートは首をかしげる。

「あとの一人はどうした。」

「はっ、スペードの者は、元が大罪人が故、武器の所持、危険物の所持がないか検査したうえで、王に謁見をと思ひまして。」

答えた兵士は、少し気弱げにいった。

王の機嫌を損ねまいと必死なのだろう。

「フン、とジークフリートは嘲るように笑った。」

「仕事の遅いやつめ」と

お前のためにやってんだろと呆れ混じりにリズはつぶやく。もちろん声には出さないで、心の中だけで。

「お待たせしました。」

超えたからかに言う兵士の声に、入口が開く。

ユダと、彼女を連れて行った兵士だ。

「ほう、女か。」

「ええ、そうですね。」

さっきの気の弱そうな兵士が言う。

「女にかけているやつは少なかったし、これは大金が出ることだろう。……女、近くに寄れ。」

ジークフリートがそういうと、ユダは兵士に連れられ、彼の近くに寄った。

「……ふむ、では、約束どおりお前達を無罪に……」

言葉はそこで途切れた。

ユダが短剣を隠し持っていて、彼の首元に短剣を突きつけたのだ。「な！無礼者！！誰か、誰かこやつをひとつとらえよ！！」

だが、彼の言葉に頷く兵士達はいない。

ジークフリートは、ユダを見、彼女がか細いからだの少女だと確認すると隙を突いて思い切り突き飛ばし、護身用のやたらと宝石の装飾が多い剣を抜いた。

バランスを崩したユダの身体は、リズたちのいる位置と王座のある位置を結ぶ階段に多々きるけられると思ったが、間一髪、一人の兵士に支えられ、助かった。

「お怪我はございませんか？ ナツシユ様。」

「貴様！？」

ユダを支えた兵士の言葉にジークフリートは目を見開く。

「生きておったのか。」

「ああ、そうさ。お前を殺して、義兄と姉を解放するために……」
「何！？」

ユダの言葉にリズは思わず声を上げた。
確かあいつの義兄さんは死んだって……？

だが、混乱するリズをよそに話はどんどん進んでいく。

「貴様のような弱き小娘に、わしを倒せると思ってか!!」

武器は短剣。

相手はそれなりの長さのある剣。

これでは勝ち目が無いと思ったが、先ほどユダを助けた兵士がマントの裏から何かを取り出した。

颯生だ。

ユダは鞘に納められた颯生を抜くと、ジークフリートに突きつけた。

「さあ、観念するんだな！ ジークフリート!!」

「ほざけええ!! こむすめがああああ!!」

激情のまま、ジークフリートは剣を振るう。

ユダは構えた颯生で彼の剣を受け流した。

戦闘経験があり、そしてかなりの実力者であるユダだが、彼女が細身の少女という事に代わりが無い。

真っ向から、剣を受け止めたらこちらにダメージが来るというのをユダはちゃんと理解していた。

だから、彼女は自分の力を使わず、流れるような動きで剣を受け流し、ジークフリートに剣を振るう。

先ほど、攻撃を受け流され、体勢を崩したジークフリートはその攻撃を上手くよけることができず、利き手に怪我を負った。

「これで最後だ！」

渾身の力をこめて、ユダは剣を振るう。

肉を裂く音と、水より粘り気のある液体のとび散る音と、鉄臭い臭いが広がる。

辺りが赤く染められた……

倒れたジークフリートは、もう二度と動くことは無かった。

勝負はあつけないほど簡単に付いた。

幼きころから剣を扱い、闘ってきた少女に、王座の上でふんぞり返っていた男が勝てるわけないのだ。

「何があつたのか説明させてもらつぜ。」

リズの言葉にユダは苦笑した。

第六章 ― 真実 ―

兵士に連れられ、ある部屋まで案内された。

「（武器の没収か？ 拙いな。 颯生がいないと計画が……）」
不安気になっているのが分かったのだろう。 兵士は優しく、リラック
クスをするようにいった。

そこで少し首をかしげる。

無罪になるとはいえ、自分は重罪人だ。 何故こんなに優しく接
してくるのか。

そう思っているのが分かったらしく、兵士は苦笑した。

兵士は幾分かためらってから、口を開く。

「ナツシュ様。」

その言葉に目を見開く。

呼ばれた名前。

兵士の顔を良く見ると、見覚えがある。

「（彼は僕が城にいた頃の部下じゃないか。）」

名前は確かナシル。

「……ナシル、か？」

「覚えてくださいましたか。」

感動のあまりか、椅子から降り、自分の前にしゃがみ込んで手を
握った。

顔を今にもなきそうに歪めたナシルにユダは苦笑した。

「元氣そうで何よりだ、が……何故君は僕を此処へ？」

「それは、」

ナシルが言おうとした時にバンと扉が開き、一人の兵士が顔を出
す。

「王への反逆を手伝ってほしいってコトっスよ、ナツシュ様。」

ナシルのことばの続きを言ったかれも同じくかつての部下。 名は、
アーケだ。

「実は、今の王に変わられてから、民の不安は募るばかり。税も上げられ、裕福な者のみが得をする世の中になりました。」

「だから、おれ達は今の王を引きずりおとして、元々王位を継ぐはずだったイサク様に王位を継いでもらおうと……」

「ちよつと待て！」

ユダは、アークの言葉をさえぎった。

イサクとは死んだはずの義兄の名だ。

「義兄は、死んだはずだろう！ 僕の目の前で、その身を貫かれて……」

「いいえ。」

ナシルは優しく否定した。

「生きております。奇跡的に急所は避けておられたようです。私達は死体処理を装って、あの方を安全な場所へ隠しました。傷はまだ完全にはいえておりませんが、自分で歩き、食事など最低限のことは出来るほど回復しておられます。」

「どうです？ ナツシユ様。協力してくれないっすかねえ？」

二人の言葉に、ユダは頷いた。

「言われずとも、だ。」

エピローグ ― 新しい時間 ―

「なるほどそういう事がなあ。実感もてねえ」

ユダに説明されたが、リズは今一実感が持てなかった。

「実感が持てずとも、真実なのだから仕様が無いだろう。」

呆れたようにユダは門に背を預けて、道の向こうを見ていた。

「もうすぐ義兄もこちらに来る頃だが……。」

二人はイサクの到着を待っていた。

諸悪の根源を倒し、早急にイサクの王位継承を促す。

今のユダの目的は、イサクの王位継承を行うことだ。

「道中で何もなければいいが、やはり僕も言った方がよかったかな？」

「お嬢、だめですよ。貴方は疲れているんですから。……あの後、部屋で倒れたのは何処の何方です？」

あの後、というのはジークフリートを殺し、彼を王位から引き摺り下ろした後。ユダは、あの後休憩用にあてがわれた部屋で倒れたのだ。

医師が言うには軽い貧血のようなものだという。

緊張が一気に解けてしまったのだろう、とも。

我ながら情けないとユダは思った。

「……お、きたぜ、ユダ！」

前方から馬車が来て、三人の前で止まった。

「エール？ エールなのか？」

馬車から降りた金髪の青年イサクは、ユダの顔をまじまじと覗き込んだ。

「他の誰に見えるんだい？ 義兄さん^{にい}」

昔と変わらない義妹の言葉にイサクは「そのようだ」と、苦笑した。

アリアの部屋へ行く途中、ユダは自分の知っていることをすべて話した。

アリアは心を病んでしまったこと。イサクに会えば直るかもしれないが、一生あのままという可能性もあるという事。

だが、イサクは笑って言った。

「どんなことをしても、彼女を取り戻してみせる」と

ユダはその言葉に笑みを見せた。

「（この人なら、アリアを任せても……。もう、僕の出番は無いのだろうな）」

幼きころは、ユダに依存しているとも言えるアリアだったが、イサクにあつてだんだん妹離れをしてきていた。

おそらく自分の出番は無いだろう、とユダはイサクを一人でアリアの部屋へ行かせた。

最初はアリアの狂ったような悲鳴となだめるようなイサクの声が聞こえていた。

だがやがて、それも収まり、すすり泣くような声が聞こえてきた。だんだん、アリアがおのれを取り戻してきたのだろう。

そろそろいいだろうか、とユダはこっそり部屋を覗いてみると

……後悔した。

寝台の上で抱き合っている二人が熱い抱擁と接吻を交わしていた。

「あ、あわわ。」

颯生はあわてた。ユダがこの手の話を苦手としているのを思い出したのだ。

いつも、はしたないと言って顔を真っ赤にして怒るのだ。

リズに助けを求めても、彼はニヤニヤと不躰に二人の様子を見ていた。

ナシルたちは王位継承の準備といって、この場にいない。

「お、お嬢??」

恐る恐る彼女の方を見ると、ユダはクスリと笑い、いつくしむような目で二人を見ると、リズの後頭部を殴り、彼の首根っこを掴む

とその場を去っていった。

「お嬢??」

扉を閉め、颯生は彼女の後を追った。

「……大丈夫、なのですか?」

颯生はユダに聞くが彼女は答えない。

「お嬢……?」

再度聞いてみたが、彼女はリズをその場に放っておくと、あそこには近づくなと無言で彼を戒めて、颯生の手を引くと、中庭へ連れて行った。

「お嬢!……どうしたんですか?」

やっとユダはこちらを振り向いた。

頬をやや赤らめて、静かに涙を流していた。

はっとした時にはユダは颯生の胸にすがりついていた。

「もう、僕は……」

「……。」

「……僕が、いなくても……アリアは大丈夫なんだろうな。」

「……お嬢。」

守るものを守りきり、それが無くなって、生きる意味を一つ失ったであろうユダの身体はひどく華奢に見えた。

「お嬢、大丈夫ですよ。……アリア様が貴方を必要としなくなっても、貴方の存在が誰からも忘れられても……、俺は貴方のそばにいますよ。」

数日後

アリアとイサク二人の挙式と、イサクの王位継承が行われた。

「二人とも、幸せそうですね。」

颯生の言葉にユダは微笑む。

「もう、僕の役目は終わり、なのかな……」

ユダの言葉に、颯生はなんと言葉をかけて良いか分からなかった。慰めてもどうせ気休め程度にしかないのだろう。

「……お嬢？」

いきなりユダが颯生の腕を引っ張ると、彼女は人々から見えない柱の影へ颯生を連れてきた。

「お嬢……！？」

いきなりユダは自身の唇と颯生のそれを重ね合わせた。

「！！！？」

「……これが僕の答えだ。」

颯生の胸に顔を押し付けて顔を隠しているユダの耳は真っ赤だった。

いつもそれこそ男より芯の強い彼女のこんな一面を、どこかで颯生は可愛いと思っていた。

叶わない恋だと諦めていた。ただの、意思を持ち少し他より強いというだけでただの剣である自分とその主で王族である彼女と、自分はずりあわないと思っていた。

ずっとずっと、この気持ちに気付いてから、諦めて、この気持ちを気付かれないように隠していた。

だが、奇跡がおきたのか。

自分の気持ちが叶う時がきてもいいのか……？

「俺は、剣ですよ？ それでも？」

「何を言っているんだ！ 僕は、僕は剣でもなんでもない、“お前”が好きなんだ！」

あまりにも必死な彼女の表情に颯生は一瞬眼を丸くした。

姉のこと以外で此処まで必死になる彼女を見るのは初めてだった。

「……分かりましたよ。」

す、とユダの顔を上げさせ、颯生は彼女に口付けをおとした。

「絶対幸せにしますよ。……エール嬢。」

ふわりと微笑むと颯生は彼女を抱きしめた。

エピローグ ―新しい時間―（後書き）

ユダはこれで終わりです。

最後まで読んでくださり、ありがとうございました。

いろいろせていを変えまくった結果、出来上がった作品です
とりあえずここでは初期設定を……

最初、主人公はアリアにする予定でした。

アリアは普通の少女でユダとは姉妹じゃありませんでした

Aliceの設定はそのまま、現実世界にいたアリアが異世界に連れてこられて、Aliceに巻き込まれるといった感じでした
ユダは男性（18〜21くらいの青年）で、ジョーカーという名前でした。

ただ、物語が複雑になりすぎて、書いている本人がわからなくなつてしまったので、設定を変えて、異世界に飛ぶということをやめた結果主人公がジョーカー（後のユダ）になりました。

そして、ジョーカーを少女（高校生くらい）にして（男だった名残で、ユダの一人称が「僕」になりました）、アリアを彼女の姉にして、皋という新しいキャラクターが生まれました。

彼も、剣だという設定は変わらないけど、性格や外見はかなり変わりました。

ものすごく無口で暗い性格で、銀髪ではなく、黒髪で黒装束を着ている青年のイメージでした。ユダのことも「お嬢」ではなく、「主」とよんでいました。

その結果、試し書きの段階で、ものすごく暗く重い話になったのでやめました。

もともと、あまり多くは語らないユダにかわり、彼女の心を語らせる約としておいたのですが・・・、全然しゃべってくれないので「もっと軽く明るくしよう」と思った結果、今の颯生が生まれまし

た。

そして、ジョーカーの名前を裏切り者にされたという設定から、ユダに代えて、今の形になりました

何はともあれ無事に完結いたしました。

気が向いたら番外編などでかき切れなかった話を書こうと思います。
す。

ここまで読んでくださった皆様、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7306q/>

Judah—ユダ—

2011年5月29日20時25分発行